

仕合わせの和

第251号

令和5年2. 1
(毎月1日発行)

言葉を伝えるのは心

住職 谷川寛俊

言葉と言うものは大切です。人を喜ばせたり、励ましたり、勇気を与えますが、使い次第で悲しませたり、傷つけたりする凶器にもなります。「口は災いのもと」と言いますが、軽はずみな発言で一生を棒に振ることも珍しくありません。口論の末、刃傷沙汰(にんじょうさた)になることもあり、その原因を聞くと、たわいない言葉がきっかけだったりします。言葉は狂気となり得る大きな力を秘めています。

私達は大勢の中で助け、助けられながら生きています。思想や環境の違いから、時には衝突することもありますが、そこで大切なのは、いかに相手を思いやり、穏やかな言葉で接するかです。優しき言葉で対応すれば人を喜ばすことが出来ますが、きつく激しい言葉で言えば人を傷つけてしまいます。

「雑宝蔵経」というお経の中に「**無財**の七施」という教えがあります。

無財の七施とは財力が無くても志さえあれば、誰にでも出来る布施行を行います。その中に「**言辞施**」という言葉の施しがあります。相手が好きになるような、優しく穏やかな言葉で人と接すること、これは立派な施しで、布施の修行になるのです。言葉さえ気を付ければ布施になるのですから、心がけがあれば、どんなでも出来ます。

人々の心を喜ばせるには、様々な行いがありますが、中でもすぐ出来るのは優しい言葉遣いかもしれません。しかし、それには真心がこもっていることが条件となってきます。単なるお世辞や誉め言葉では人は喜びません。相手を思いやる心がなければ、相手に届きません。

真成寺ホームページ



玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子
TEL・FAX 0765-22-2268
携帯 080-3744-2523
こちらの番号でも
お寺につながります。

言葉で人を助けたり、また自分が救われることも多々あります。同じ言葉でも優しいしやべり方、柔らかな物言いと、きついとげのある言い方では、相手に与える印象は天地ほどの違いがあります。

日蓮聖人がご信者さんに送られたお手紙の中で、「わざわざいは口より出て身をやる」とお示し下さっています。言葉遣い一つで人は幸せになったり、不幸になったりするものです。しまつたと気付いても手遅れのこともあり、細心の注意が必要です。

よくある話ですが、ある結婚式で乾杯の音頭を指名された人が、「おめでとー」の一言で済ませれば良かったものを全員にグラスを持たせたまま延々と話は続き、五分、十分と経過、みんながグラスをテーブルに置き、年配者は椅子に座り始める。それでもお話は終わらない。そのような経験をされた方もおられるのではないのでしょうか？

どんな有益な話であろうとも、やはり時と場合を考えなければなりません。その場の雰囲気を知り、豊かな感受性も必要です。折角のお話がマイナスになりかねません。

言葉を伝えるのは心です。口先だけで言っているのでは、人の心を喜ばせることは出来ません。やはり、心の底からその人の事を思い、発した言葉により感激し、喜びを生み出す源なのではないでしょうか。

言辞柔軟 悦可衆心 (方便品第二)

優しい言葉は、相手を悦ばせる

